



## 『祝福される幸いな家庭の十戒④』

〈安息日を守る家庭〉

説教者：鄭南哲牧師

聖書本文：出エジプト記20章8－11節・暗唱聖句：ヘブル人への手紙4章10節 (Rev.Jung nam-chul)

愛する信仰の家族のみなさん！一週間も主にあって平安でしたか。今日は十戒の四番目の戒めである“安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。(8節)”という御言葉をもって神様からの恵みを分かち合いたいと思います。

初めから英語の表現を使って申し訳ありませんが、英語圏の国で家に訪ねて来るお客さんによく使われている英語の表現があります。“Make yourself at home!”直訳すると、“自分の家のように楽にしてください。”という意味です。これは家自体が人々の安息の場所であることをよく表してくれる表現だと言えます。一日中職場で背一杯頑張っただけ汗を流しながら働いた後、家に戻ると家は安息の巣として我々を待っています。家での安息をとおして私たちは新たな力を得て次の日、また職場に向かっています。もし、家での適切な安息を取れなかったら、私たちのあらゆる行動と人生の方向がずれてしまうかも知れません。

そういう意味で、聖書は安息日を守れと命じているのです。安息日を守る家庭になりましょう。

ヘブル人への手紙4章11節にも、「私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め、」とされています。神様は我々に安息を守る信仰、そして家庭となるようにと命じられています。私たちが安息を守れば、安息が我々を守ってくれると約束されています。

### 〈① 真の安息日は一番最後の日ではなく、一番初めの日であります。〉

厳密に言えば、聖書をよく観察してみると安息日は一週間の一番最後に守る日ではなく、一週間の一番初めに守るべき日であることがわかります。なぜでしょうか。旧約聖書の創世記を見ると、神様が六日間、天地万物を創造された時、人間は一番最後の六日目に造られました。神様にとっては七日目に安息を取って下さったのですが、人間にとってみれば人間が造られた次の日、つまり一番最初に向かえた日が安息の日になったのがわかります。これは、つまり人間は働いてから、休んだのではなく、休んでから働いたことがわかります。神様は人が安息から得られた力とエネルギーによって、また頑張っただけ働きの六日をたえることができるように造られた存在であるを創世記を通して我らは学ぶことが出来ます。そういうわけで、カレンダーをよくみてみると日本の多くのカレンダーは日曜日を一週間の最後においていますが、特にキリスト教の信仰をもっている西洋の多くの国のカレンダーには多く日曜日を一週間の一番初めにおいているのはこのような信仰観から来たわけでありませぬ。

こんにちの家庭はとても忙しくてとても疲れているように見えます。そんなに深刻でもなく、大きい問題をもっているわけでもないのに、様々な葛藤や、問題にぶつかっている根本的な原因は実際、神様からの安息の命令に従わなかったため、すぐ敏感になり、よく感情的になり、ぶつかっている問題をなかなか克服できず、苦勞しているのではないかと思います。

みなさん。よく考えてみてください。みなさんが疲れているとき、どうでしょうか。大したことでもないのに、敏感になって感情のコントロールもできず、すぐ不平不満的になってすぐだれかに攻めたり、考えすぎて大げさに考え込んでしまったことはないでしょうか。なぜ、疲れて、無気力になって、空しく感じてしまい弱まってしまうのでしょうか。その根本的な原因はちゃんと神の安息を頂いてないからではないでしょうか。我々を創造された神様はそんな私たちの弱さをよくご存知だったため、むしろ、創造の秩序通り、私たちの命を守り、祝福される家庭となるために、神様は信じる全ての者たちに、安息日を定め、ちゃんと守るようにと命じられたわけあります。するとどうすれば安息日をちゃんと守る家庭となるのでしょうか。一緒に考えて見ましょう。

### 〈② 安息日を正しく守り行うため：まず、六日間神からの働きとして、召命を持って忠実に働くべきである。〉

今日は私たちは神の十戒の四番目の戒めを覚える時、よく安息だけを強調する傾向があります。しかし、本文の9節は安息の重要な前提があることを忘れてはいけません。今日の本文の9節にも「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。」とされています。それは、まず、六日間の忠実な労働をも強調されていることを忘れてはいけません。6日間の忠実な労働こそ真の神の喜びと正しい安息をいただけるということです。つまり、月曜日から土曜日まで、自分に与えられている仕事を頑張っただけ働いた者こそがふさわしい安息を迎えられ、味わえるということです。

新約聖書で使徒パウロも“働きたくない者は食べるな”と命じました。(テサロニケ人への手紙第二3章10節)

キリスト教のこのような労働観はキリストの福音が伝えられている所なら、どこも勤勉な労働文化の花を咲かせ、経済的な先進社会になるようにと寄与しました。社会学に大きく貢献したドイツの社会学者であるマックス・ヴェーバーは彼の有名な著書[プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神(The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism)]にこのようなことをアピールしました。清教徒たちはあらゆる職業を神様からの召命だと信じ、使命を持って頑張って働き、お金の主人は自分ではなく神様ですから、働いたお金を無駄遣いしないで、節約し、貯金したため、このような精神が近代的資本主義を発展させる力となったことです。ですから、労働、仕事、働きは罰ではなく、特権であることを私たちは知らなければなりません。むしろ、働くことを卑しく思ったり、働かないで楽に遊びながら、食べようとするのも問題であり、罪であることを忘れないでください。詩篇128篇1-2節に、「幸いなことよ。すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。」

### <③ 労働は決して人の墮落の結果でも罪の結果でもありません。>

時々、クリスチャンの方々の中でさえ、人間の労働について、墮落の結果もしくは罰の結果だと誤解している方がいます。しかし、覚えるべきなのは人間の墮落の以前にも、人間は働いていたという事実です。

創世記2章15節をみると、「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕(たがや)させ、またそこを守らせた。」

墮落は楽しいことを苦しいことに変えてしまったのです。ですから、働くのが苦しくなったら、それが墮落の影響だと思ってください。

しかし、大切なことは、私たちがもはやキリストにあって新しくされた者であることです。神の救いは私たちの生き方や働く態度にも影響を与え及ぼします。私たちは苦しみながら働いてはいけません。感謝しながら、賛美しながら、働かなければなりません。仕事をくださった神様、そして働ける健康を与えてくださった神様に感謝をもって楽しく働きましょう。

フランスの宗教改革者であるジャン・カルヴィン先生は“我々に与えられている職業はどれも卑しいことなく、牧師の働きのみならず、我々がやっているすべての職業は神様からの与えられた仕事だと信じて使命を持って最善を尽くすべきである。”と言われました。これを“職業召命論”と言います。教会の牧師や伝道師などの教職者が神様から召しを受けて働くように、誰でも自分に与えられた仕事は神様の前では等しく大切であり、尊いという信仰の姿勢でした。

これによって以前のヨーロッパの労働者たちは何もしないで、人生を楽しんでいる金持ちの人生をうらやましがり、働かなければならない、決まっている自分たちの人生を悲観していた労働と仕事に対する考え方をかえる大革命になり、この意識と生き方の転換がやがて18世紀半ばから19世紀にかけて起きたヨーロッパの産業革命が起こされ、社会を発展させる原動力になったことを歴史を通して我々は知ることが出来ます。

ですから、愛するみなさん！キリストの信じるみなさん！家で働いているクリスチャン主婦たちのみなさんも大変な家事の労働として喜んで働きましょう。子育ても同じです。あるクリスチャン家庭に子供が6人もいましたが、子供たちがお母さんにこのような質問をよくしたそうです。“お母さん、もともと子供が6人もほしくて計画したの。”

するとお母さんは機嫌がいいときは喜んで“もちろん、そうだよ。きみたちは神様からの宝であり、祝福なのよ。”ところが、お母さんが機嫌がよくないときこのような質問をされるとこう答えたそうです。“きみたちは、どうしようもできない神様からの大変な十字架たちなの。ママに背負われているのよ。仕方ないわ。”

みなさん!旧約聖書の中詩篇127篇3節を読んでみると、子供たちは主の賜物(たまもの)、胎(たい)の実(み)は報酬(ほうしゅう)であると聖書は教えています。ですから、主婦たちは家庭で子供たちをかえりみ、感謝と喜びをもって育ててください。

ですから、安息日を守る健康な家庭を立てるのに大切な前提は家族員がまず頑張って働くべきであることです。そして、年寄りの方々はいま置かれている自分の生活や環境において日々を感謝して過ごすことこそ、神様に喜ばされるのではないかと思います。

### <④ 真の安息は主の前に六日間の働きを止め、御前に降ろし委ねる切る事>

聖書の本文には七日目の日は「どんな仕事もしてはならない」と教えています。10節を読んでみましょう。「しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。一あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女

奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる寄留者も。」

この箇所が一番大切なところは「どんな仕事もしてはならない」です。つまり、六日間やって来たすべてを止めるべきであることです。ヘブル語で、安息と言う単語は「シャバット」ですが、これは「仕事を中断する、おろす、委ね切って止める、休む。」という意味です。神学者であるマルバドンという人は彼の名著[安息]という本で、仕事を休めるだけではなく、なやみ、患いも、そして、緊張も止めることだと言っています。所有しようとする努力も、自分が神になろうとする努力も止めるべきだと語っています。

<休めない、止められない原因>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！私たちが休むべき時、休めない原因はどこにあるでしょうか。それは休んでしまうと、仕事を終えないと大変なことになるような不安の思いがあるからではないでしょうか。なんとなく自分が動かないと気が済まない、すべてを監督しないといけないような気がします。分かりやすく言うと、神様に完全にゆだねられない、任せられない事です。それを裏付けると、神様の御力を疑い、任せられない信仰の疑いのためであり、人はまるで自分がしきりに神様のように全部出来るかのように、神様に任せるより自分がやった方がもっとうまく出来るかのように思い込みやすい霊的な高慢のためではありませんか。ですから、神の安息に入る、従うと言う言葉は自分が神になろうとするのをやめさせ、下ろす。神にすべてを任せて、弱くて限界のある自分を休ませ再充電させるという意味も含まれています。

出エジプト記20章11節の後半には「それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。」と言われました。

どんな意味ですか。安息日は我々の幸福のために神様がご自身で備えられ定められた日であることです。神を絶対に信じ、安息日をちゃんと守る人たちには、決して神様は損にさせない、むしろさらに強めさせ、全てを全う出来るように主が導き恵ませて下さるという約束が含まれている4つ目の戒めであります。

例) アメリカのまだ自動車も、車もなかった西部開拓時代に起こった実際の出来事です。一つの群れの馬車がアメリカ中部のセントルイスから西部オレゴンに向かっていました。みな信仰を持っていたクリスチャンたちだったので日曜日は礼拝し、安息して移動をしないで休みました。しかしすばやく冬が近づいて来ていたので、一部の人は大雪が降る前に目的地に着けないかもしれないという不安のため安息日にも走ることを提案し始めました。結局意見は合わず、二つのチームに分かれて動くことになりました。日曜日に休むチームと日曜日も走るチームと分かれてしまいましたが、どうなったのでしょうか。言う余地もなく日曜日に休んだチームが結局オレゴンに早く着きました。安息日に十分休んだ後の活力によってもっと早く走ることができたのです。マルバドンという方はこの実話を引用しながら結論的にこう言いました。“神様はご自分の戒めを尊重する者たちを尊重される。”

人類の歴史においても似たような事例があります。みなさんもよくご存知のロシアは以前ソ連という共産主義の国でした。ソ連で共産党の革命が成功した後、共産党の指導者たちは労働者たちの生産量を増やすためにキリスト教文化の産物である日曜日休みをやぶるために十日間働いて休む制度を決意しました。しかしその結果はかえて経済をもっと悪くさせる一方でした。病気になる人や事故などが急増するなど施行一年もたたぬうちに結局六日働いて、日曜日は休む日に戻ってしまいました。

愛するみなさん!私たちは働かないとどこか不安な気持ちがあり、自分がやらなければならないような微妙な不安もっていませんか。神様は休むべき時には、休めるようにと命じられます。この世で一番かわいそうな人がいるなら、それは休めずたえず、死ぬほど働いて結局死んでしまう人ではありませんか。仕事が家庭より、神様より優先になってしまい、大切な全てを失ってしまう残念な結果が今日どれほど多いのか分かりません。仕事が神様から与えられている使命であり、人生の幸福の為の一つの手段ですが、間違ったら、仕事が自分の人生全てを支配する、一つの偶像の神のようにならないように気を付けなければなりません。

仕事自体が人の生きる目的になってはならないということです。

神様は我々の家庭と人生の幸福のために、安息を守れと命じられたのです。ですから、心と体の安息をもって幸福を守るみなさんとなりますように祝福します。

<⑥ 安息日には礼拝と信仰の交わりを通して、たましいの安息を得られる日です。>

安息と言われると、一般的に肉体的な安息をまず思い出しますが、より大切なことは霊的な安息です。霊的な休みがない安息は完全ではありません。実際、イエス様が来られた目的もまさに人々に真の霊的な安息を与えるためでした。

あの有名なマタイの福音書11章28節にイエス様はこう言われています。

**「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」**

我々の人生が休めない根本的な原因は罪からの重荷であり、イエス様はご自分で我々の罪の重荷を負ってくださることにより、我々を救ったのです。ですから、愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさん！ある意味で救いというのは、たましいの安息の別の名前と言えます。安息に入ると言う言葉は救いを経験するという表現でもあります。しかし、イエスキリストを信じて救われたという事実だけで、霊的な休みが維持されるものではありません。毎週の初めの主の日、主の御体なる主の教会の中で主のご臨在の中で、礼拝を通して、どこでも得られない、神様からの魂が霊の糧を供給され、きよめられ、強められて行く時、豊かさ、平安、感謝、喜びが保たれます。ヘブル人への手紙4章10節にこう書かれています。

**「神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」**

### <安息日を区別させ、聖なるものとさせた神様>

本文の11節に「主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された」と言われます。ここで聖なるものという単語はヘブル語の“カドシュー”とあって、“区別して取っておく。”という意味です。信仰の先輩たちはこの日を区別して神様を礼拝し、聖書を読み、祈りと交わり、そして、きよい読書(Lectio Divina)をしながら、神様のみで頂ける満たされる霊的糧を供給していただく時間として守り過ぎて来たのです。

イスラエルの人たちは安息日を意味するもっと上品な単語として、‘シャバット’の代わりに‘メヌハ(menuha)’という単語を使います。メヌハとは“満たされる平安、美しい静けさ、健康な力”を意味します。つまり、日曜日、安息日が単純に何もしない休む日ではなく、神様から新たな力、平安、生ける恵みと喜びを頂ける、供給され満たされる日、今日の言葉でいうと、神様に再充電される日であること覚えさせるためにこの単語を使って来たわけであります。そういうわけで、イスラエルの人たちは永遠のいのちを“永遠のメヌハ”だと言いました。あの有名な詩篇23篇2節に「主は私を緑の牧場にふさせ、いこいの水のほとりに伴われます。」の、“いこいの水のほとり”がまさにメヌハなのです。ですから、愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

ヘブル人への手紙4章16節「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」安息日、主の日に真の全能なる神様に我らのたましいの安息、メヌハの安息を礼拝に出て、特別に臨在される神様を通して得られるべきじゃありませんか！

クリスチャンの親は家庭を安息の場所としてつくる責任があります。ユダヤ人たちは安息日の前日から食べ物を用意しておいて、安息日は主婦たちも休みながら礼拝し、賛美と祈り、散歩などもしながら、家族との再充電の一時を過ごしました。何よりも神様の御言葉と礼拝を通して、信仰の家族との交わりを通して、霊の安息に入り、神の愛と恵みを分かち合いました。私たちがこの姿勢をみならって安息日の前日から準備してみるのはいかがでしょうか。

### <⑥ 安息を守る祝福された家庭となるように祝福します。>

ユダヤ人たちは安息日が始まる夜になるといつも二つのロウソクをとめます。一つは出エジプト記の安息を‘覚えなさい’の命令に対する従順を意味し、もう一つは申命記の安息日を“守りなさい。”の命令に対する従順を意味します。二つのロウソクをとめた後、家族の代表が次のように祈ります。“宇宙の王である我々の神様、あなたの御言葉をもって我々をきよくしてくださるために、安息の火をともしなさいと命じられたあなたさまに感謝と賛美をおさげします。われわれの家を明かす安息日のこのろうそくの火が我々の家庭を照らす平安と幸福となりますように。ああ、主よ。このきよい安息日に我々を祝福しあなたさまの栄光で我々を照らしてください。我々のくらやみに照らし、我々と全人類、特にあなた様の子供たちをあなたの真理で、永遠の光で導いてください。アーメン”このような祈り、賛美、礼拝、つまり霊の安息によって信仰のきよさを守ろうとしたのです。このようなすばらしい安息を守る家庭こそ、主にある健康な家庭になるのではないのでしょうか。これから神様からの十戒の4つ目の戒めを全家族が最優先に守り行うことにより、毎週の霊肉の安息をとおして、みなさんご自分と家族が力づけられて、神様から与えられたまた明日からの使命を果たし続けていける祝福と安らぎと新たな力がクリスチャンプレイズチャーチの全家族、全家庭の上に満ち溢れますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！